

デイケア便り 11月号

リハビリの様子



ワールドメニュー ～メキシコ～

- タコライス
- セビーチェ
- チリコンカン
- ポソレスープ

今月のコラム

看取りに関わって感謝
在宅介護センター 大倉 清美



令和2年6月より地域包括支援センターより、現所属・在宅介護支援センターへ部署異動となりました。これまでの施設ケアマネージャー・地域包括予防ケアマネージャーの経験を活かし、また仲間の支援を受け、楽しく、また多くの事を学びながら、日々過ごしています。

今回は、在宅介護センター(居宅部門)だからこそ、経験してきた看取りの事例を紹介したいと思います。

ケアマネージャーとしての看取りはこれまでも多く持ちますが、紹介の理由は、昨今のコロナ禍において、ご家族の決断と連携、対応に感動し、そのような場面に関われた事への感謝があります。

いずれは誰にでもおとずれる「死期」ですが、実際に近づいたことが分かった時のご本人やご家族の不安は計り知れないものと思われまます。そのような場面で、相談援助職に何が出来るか？知識やサービスマネジメント調整は当然のこと、心理的な支えや言葉の配慮、心づもり・心構えが必要だと感じます。今回は、これらの対応が出来ていたのか否かはともあれ、関わりを頂いた感謝を言葉にできればと思います。

ご本人はすでに他界されています。私の関わりはわずか3ヶ月ほどでした。ご相談を受けた時には、ご家族はすでに自宅での看取りを決意され、退院を相談。また日々介護を担うことになるであろう主介護者の心身の軽減も、近隣に住まう家族が支援するという、ご本人にとって恵まれた環境がありました。ご本人とはお話しする機会が少なかったものの、善因善果を感じる方でありました。そして、私が感謝を受けたもうひとつの理由は、主介護者と、その介護者を支援するご家族が、最期までご本人の主体性・自力・自律を尊重され、そして黒子である私たちサービスマネージャーへ常に感謝の言葉を下さった事です。家族の揃った時に介護の手法を学ばれたり、介護負担が偏らないよう家族間で買い物や入浴等の役割分担を、お互いの健康を気遣う。このような連携があったからこそ、短期間で乗りながらケアマネージャーとしての立ち位置が自然と成り立ち、気を張らず関わりを持てたのだと思います。

そしてご逝去された今も、ご家族は、笑顔でご挨拶下さいます。その表情や言葉は、日々、私自身の活力となっています。

デイケアのご利用者様であるお母様宛に息子様が書いたお手紙です。9月の敬老会に息子様からお預りしました。その一文をご紹介したいと思います。

敬老の日に思うこと

息子様：勝田 正人様
お母様：勝田 常盤様



よくあることと思いますが、私は母のことをばあちゃんと呼んでいて、母の名前は「ときわ」と言います。ひらがなで書くとはあちゃんらしい名前ですが、漢字で書くとは「常盤」と書き、とてもごつごつした名前です。男と間違えられることが時々あります。

普段、ばあちゃんの生活をサポートしていると色々な書類にはあちゃんの名前を書かなくてはなりません。その画数は氏名を合計すると四十二画にもなりとても面倒です。年齢が九十歳になった頃から、折り紙もちゃんと作れなくなりました。中途半端な作りかけがテーブルの上の山のようにちらかり、時々整理していますがこれもとても面倒です。

この前まで元気に歌っていた唱歌も、歌詞があやふやでちゃんと歌えません。

でも、ご飯はこぼしながら全部食べ、夜もベッドに入ったとたん、朝までスースー眠り続けます。私はこのスースーを聴くと、安心して眠れます。

ちゃんと確かめたわけではありませんが、マザーテレサの言葉に『この世の最大の不幸は、誰からも自分が必要とされていないと感じることです。』というのがあることを何かで読んだことがあります。

わたしとばあちゃんも、お互いが必要とする関係であり続けたいと思っています。

また、「みらいのさと」で一緒のおじいちゃん、おばあちゃんもご家族とそんな毎日を過ごされていることと思います。